村研のみなさんに

ウルリヒ・メーワルト

はじめまして。私はベルリン自由大学東アジア研究所のUlrich・MÖHWALDと申します。国際交流基金の奨学金で日本に留学する事ができまして、九月一日より、利谷信義先生の御指導で、東京大学社会科学研究所の外国人研究員として一年間滞在させていただく事になりました。

私は西ドイツのマールブルク大学で日本学・社会学・中国学や民族学を勉強しました。一九八四年以後、ベルリン自由大学東アジア研究所日本研究学科の助手をしています。

私の研究分野は家族社会学や農村社会学や日本社会科学の歴史です。私は今後、昭和始めの日本家族社会学・農村社会学における実証的研究についての史料を集めるつもりです。特に、戸田貞三・鈴木栄太郎・有賀喜左衛門や喜多野清一の日本の家族と村落社会についての研究の発展とそれらの研究者の相互関係に興味があります。

私が始めてこの課題に取り組む事になりましたのは、卒業論文を書いた時の事です。その際、私は有賀喜左衛門の同族・日本小作制度に関する理論を勉強しました。しかし、今は、もっと社会史的な視点から昭和初期の実証的社会学を研究するつもりです。最初に、KUHNのパラダイム説から出発しましたが、TOULMINとWEINGARTENのKUHNに対しての批判を受けて、私の研究に

とっての「パラダイム」はつぎのように概念規定ができます。一つの学問領域内で、あるいはその領域の一部において研究している一つの学者グループの、主として学問的な仕事にとって共通の、その学者の研究の問題提起や調査方法を定める、大体同じような見解や理論上・方法論上の根本的発想や価値や規範の一セットはパラダイムと呼ばれます。また、私は、一つの学問領域の中で新しいパラダイムが成立し、それが一般に受け入れられるためには、歴史的・社会的な理由でこの学問領域に対して新しい問題および要求が提起される事が決定的な条件であると思います。それらの新しい問題および要求を解決するためには、新しい研究方法の開発も必要になります。その時、それらの新しいアプローチや理論的・方法論的見解の確立は主として、すでにこの学問領域の内部あるいは外部に存在している構想のバリエーションの使用やその新しい方向づけに基づいていると思います。

この考え方から、私は昭和の始めにおける家族や農村についての実証的研究を日本社会学の中で成立した新しいパラダイムとして把握してみたいと考えています。ですから、私のこの研究は純粋な学説史的な記述では有りえず、むしろ思想史的・社会史的・政治史的な文脈の全体の中でその新しいパラダイムの成立が捉えなければなりません。そして、私の研究はつぎの四つの問題群を足場としています。

① 社会経済史的には、都市化と産業化の文脈の中で起きたいわゆる家族解体や農村恐慌は実証的研究の背景を構成しました。

② 政治的枠組の中で見ると、ファシズム体制の成立やいわゆる危険思想の排除に伴う、国家による大学の統制や出版物の検閲は、社会学的な教育や研究の可能性と限界とを規定しました。

③ 日本社会学自体の歴史的発展の他に、主として柳田国男の民俗学の進展や日本資本主義論争の展開は実証的研究の成立にとってもっとも重要な思想史的・学問史的な条件であったと思います。しかし、農本主義やその他の政治的・社会的なイデオロギーの広まりもそれに影響を与えたはずだと思います。

④ 一つの新しいパラダイムは学問の制度的組織と学者の集団的生活の中でその作用を展開します。それ故に、大学の講座や研究所、その他の研究機関または研究プロジェクトの資金がどこから出されたか、学会や雑誌、学者の相互関係あるいは彼らの友人関係や対立関係にある人々のことを問題にしなければなりません。

そして、一方で私は日本の実証的社会学の展開に関する文献を集めたいと思っていますが、しかし、他方で、私はそれらの昭和の初期に日本家族と農村社会の実証研究を行なった研究者と個人的に関係があった人々と話し、更に私的な資料も見たいと思っています。そして、それらの調査の現場である村を訪れる事が最終的に必要であると考えています。

どうかよろしくおねがいいたします。